

子ども健康と環境に関する全国調査(エコチル調査)
論文概要の和文様式

雑誌における論文タイトル: Neurodevelopmental Trajectories in Children with Cleft Lip and Palate: A Longitudinal Study Based on the Japan Environment and Children's Study

和文タイトル: 口唇口蓋裂児の乳幼児期の発育発達: エコチル調査による縦断研究

ユニットセンター(UC)等名: 宮城ユニットセンター

サブユニットセンター(SUC)名:

発表雑誌名: European Journal of Oral Sciences

年: 2022

DOI: 10.1111/eos.12857

筆頭著者名: 土谷 忍

所属 UC 名: 宮城ユニットセンター

目的:

口唇口蓋裂はもともと多い外表先天異常であり、子どもの発達において負の影響を及ぼすとされていますが、これまでの先行研究は横断研究が多く、その関連は十分に明らかになっていません。本研究では、大規模出生コホート調査であるエコチル調査の縦断データを用い、口唇口蓋裂児の幼児期の発達について検討を行うことを目的としました。

方法:

エコチル調査に参加する子どもの3歳時データを用いました。子どもの発達の評価には、日本語版Ages and Stages Questionnaire第3版(ASQ-3)を用いました。ASQ-3はコミュニケーション、粗大運動、微細運動、問題解決、個人・社会の5領域、30の質問で構成される質問票で、生後6か月から36か月まで6か月毎に保護者による回答を得ました。口唇口蓋裂を伴う子どもと先天異常を伴わない子どものASQ-3の点数を、線形混合モデルを用いて比較しました。

結果:

本研究の対象となった91,734名の子どもうち、195名に口唇口蓋裂が認められました。ASQ-3の各項目の平均点を口唇口蓋裂群と対照群で比較すると、18か月から36か月のコミュニケーション、18・24か月の微細運動、30・36か月の問題解決、6・36か月の個人・社会の領域について、口唇口蓋裂群が対照群よりも有意に低い点数を示しました。最も大きな違いは24か月の言語において認められましたが、それ以降、差は少なくなりました。同様の変化が粗大運動の領域でも見られました。

考察(研究の限界を含める):

本研究では、口唇口蓋裂児の生後6か月から36か月の間の発達について、大規模コホート調査の縦断データを用いて示しました。口唇口蓋裂のない子どもとの最も大きな違いは24か月のコミュニケーション領域において認められ、それ以降、差は少なくなっていく傾向がみられ、粗大運動領域でも同様の傾向がみられました。本研究の限界として、口唇口蓋裂の手術歴や言語訓練についての情報が不足しているため、それらが発達に与える影響を考慮できていないこと、個人個人がどのように発達していくのかについて検討できていないことがあげられます。

結論:

生後6か月から36か月の間の口唇口蓋裂児の発達は、先天異常を伴わない子どもと比較して遅れる傾向があることが示唆されました。それ以降の発達について、今後さらなる検討が必要と考えられます。